

# 『大日經』百六十心について

## 中 条 裕 康

『大日經』住心品においては、百六十心を越える次第が真言門の修行の中心となっている。それゆえ、漢訳住心品中の〈九句の発問〉に対する如來の答説には次のように示されている。

(1)越百六十心<sup>1)</sup>、生広大功德。其性常堅固、知彼菩提生。

この文の意味は、一般に百六十心を越えると浄菩提心が生ずることであると解釈されている。ところが、この答説に相当する広説には次のように示されているのである。

(2)秘密主<sup>2)</sup>、一二三四五再数、凡百六十心。越世間三妄執、出世間心生。

(3)謂如是解唯蘊無我、根境界淹留修行、拔業煩惱株杭無明種子生十二因縁、離建立宗等。如是湛寂、一切外道所不能知。先仏宣説離一切過。秘密主、彼出世間心、住蘊中。

この中、(2)の文を『大日經疏』では二通りに解釈して示されている。一つは、百六十心を世間の三妄執とし、出世間心を浄菩提心とする。すなわち、百六十心<sup>3)</sup>等の麁・細・極細という三段階の妄執を越えると浄菩提心が生ずると解釈するのである。この意味において、上記の如來の答説の文と一致するものである。もう一つは、『大疏』に、

然れども<sup>4)</sup>、第一重の内に就いて、最初に唯蘊無我を了解する時を、即ち出世間心生ずと名け、世間の六十心を度して、我倒所生の三毒の根本を離るるを、越三妄執と名く。

と示されているように、世間の三妄執を後に經に示される世間の個々の六十心とし、それがまた三毒あるいは根と境と界の三妄執、あるいは業と煩惱の株杭と及び無明の種子の三妄執であるとして三種の三妄執を示している<sup>5)</sup>。そしてさらに、出世間心を唯蘊無我心とするのである。この意味においては、先の如來の答説の文とはまったく一致しない。なにゆえにこのような二通りの、それも内容の異なる解釈をしたのか。それは、善無畏三蔵が訳經の過程において矛盾を感じたからに他ならない。つまり、經において如來の答説では、百六十心を越えると浄菩提心を生ずるといいながら後になって、百六十心を越えると唯蘊無我心としての出世間心が生ずるとしているからである。ここで彼は百六十心をどう解釈すべきか悩んだはずである。それで結局、二通りの解釈をせざるを得なかったのである。

すなわち、百六十心を本質的にとらえて妄執とする一方、個々の心のあり様としての世間の六十心としたわけである。しかし実際、問題はそれだけでは済まなかったのである。ここで観点をチベット訳から見直してみるとしよう。

先ず如来の答説(1)はチベット訳ではどうであるか見てみよう。

(4)百六十心<sup>6)</sup>より越えてから、菩提そのものために、広大な福德によって生ずる堅固にして、菩提を生ずることになる(心)を生ずるであろう。

/ sems ni brgya rtsa drug bcu las // ḥdas nas byañ chub ṅid kyi phyir // bsod  
nams ches ḥbyuñ sñiñ po ste // byañ chub ḥbyuñ ba skye bar ḥgyur /

この文は、ほぼ漢訳と一致していると思われる。しかし広説たる(2)のチベット訳は次のようになっている。

(5)秘密主よ、このように一二三四五が二倍されることによって、世間の心は百六十で、三劫によって越えてから、出世間の心を生じて、すなわち、

(6)これは、実に唯蘊のみで、我は決して存在しない。

gsañ ba paḥi bdag po // de ltar na gcig gñis gsum bshi lña gñis su bsgyur ba  
byas pas / ḥjig rten paḥi sems brgya drug bcu bskal pa gsum gyis ḥdas nas /  
ḥjig rten las ḥdas paḥi sems skye ste / ḥdi lta ste / ḥdi ni phuñ po tsam ṅid  
de / bdag ni nam yañ yod ma yin /

この(5)の文は漢訳とはかなり相違している。それは、単に時間を表わす劫(kalpa)が「妄執」と翻訳されているというだけでなく、文の構造がまったく違っているのである。すなわち、「世間」という語は(2)では「三妄執(チベット訳の「三劫」に相当)」にかかっているが、(5)では「百六十心」にかかっているということ、そしてまた、「越える」という動詞の目的語が、(2)では「世間の三妄執」であり、(5)では「世間の百六十心」であることである。ここで、チベット訳を信用するならば、漢訳は明らかに意図的に改訳されたものであることがわかる。その意図とは、まず第一に百六十心を世間心に限定しないためと、そして第二に、劫を時間と理解することが不適當と考えられるためである。

さてそれはさておき、チベット訳においても、やはり先の矛盾につき当たるのである。すなわち、(4)と(5)の「百六十心」が同じ意味のものであるとすると、いったい百六十心を越えて生ずるのは(4)にあるように淨菩提心なのか、はたまた(6)にあるように唯蘊無我心としての出世間心なのか、当然これを解説したブツダグヒャも悩んだはずである。しかし実際、彼はさほど悩まなかったとも言える。それは、彼の用いた本経(広釈未再治本中に示される)の(4)に相当する部分には、次

のように示されていたからである。

(7)百六十心<sup>8)</sup>を越える多くの後に(菩提心が)生ずる。

sems brgya drug cu las ḥdas paḥi skye boḥi ḥog tu skye ba

つまり、百六十心を越えることがすぐに菩提心に直結するというのではなくて、百六十心を越えた後に、さらに菩提心を生ずるに至るまでには「多くの」次第を必要とするということなのである。それゆえ、ブツダグヒャは(7)を次のように解説している。

世間<sup>9)</sup>の百六十心より越えてから、法無我を悟り、信解行地において三心を修習し、諸ハラミツを行じ、そして四摂事をなしておえてから信解行地を転じて、歡喜心地・智地に入るとされ、

ḥjig rten paḥi sems brgya drug cu las ḥdas nas chos la bdag med par rtogs te mos pas spyod paḥi sa la sems gsum rnam par bsgom pa daḥ / pha rol tu phyin pa rnam rnam par spyad pa daḥ / bsdu baḥi dños po rnam bshi byas nas mos pa spyod paḥi sa la ḥphar te / sa rab tu dgaḥ baḥi sems ye śes kyi sa la shugs pa la bya ste /

このように、(4)(5)は矛盾していないことになる。ところが、おもしろいことにブツダグヒャにおいても、やはり百六十心を本質的にとらえて大中小の障碍分とする見方<sup>10)</sup>があり、その場合、百六十心は世間心だけに限定されることなく、菩提心を生ずるまでの出世間心にも関係してくるのである。この意味においては、まさしく百六十心を越えると浄菩提心を生ずると解釈することも可能なわけである。しかし、なにゆえブツダグヒャはこのようなよけいな解釈を加えたのだろうか。本経の文(4)をそのまま素直に理解しようとするれば、百六十心を越えると浄菩提心が生ずるということになる。さらに、彼の用いた本経にはまた次のように示されている。

(8)「それから<sup>11)</sup>世尊に対し金剛手はこのように申し上げた。世尊よ、それらの心の相続(samṭāna 連続)を御説明下さい」とは、前に「心を以て、百六十の相続を越えてから菩提心を生ずる」と説かれ、「それらの心の相続を以て、相はどのようでありましょうか御説明下さい」と言われたのである。

de nas bcom ldan ḥdas la phyag na rdo rje ḥdi skad ces gsol to // bcom ldan ḥdas sems kyi rgyud de dag bśad du gsol shes pa ni / sñar sems kyis rgyud brgya drug cu ḥdas nas byañ chub kyi sems skyeḥo shes gsuñs pa / sems kyi rgyud de rnam kyis mtshan ñid ci ḥdra ba lags bśad du gsol / shes bya la

byaḥo /

ここでは、百六十心のかわりに「百六十の相続」と表現されており、またはっきりと「菩提心を生ずる」と示されている。この「心を以て、百六十の相続を越えてから菩提心を生ずる」という経文があるゆえに、彼は百六十心の実質（*dñospo*）における障碍分<sup>10)</sup>の見解を導き出したのであろうことがここに推測されるのである。事実、障碍分の見解はこの(8)の後で示されているのである。

要するに、百六十心を個々の世間心ととらえるか、あるいは、本質的に見て実質としてとらえるかによって、その解釈の仕方は異なるのである。この百六十心を私たちがどう考えるかによるのであって、善無畏三蔵もブツダグヒャも二通りの解釈をして、私たちにその選択を求めているといえるだろう。だが、解釈上の問題として、善無畏三蔵は百六十心に関するだけでなく三劫に関しても大きな疑念をいだいたということにおいて、問題は百六十心だけで済まなかった訳であり、それによって、彼は独特の見解を導き出すに至ったのである。

- 
- 1) 大正蔵 18, 2, a.
  - 2) " 18, 3, a~b.
  - 3) " 39, 600, c 以下参照。
  - 4) " 39, 600, c~601, a.
  - 5) " 39, 601, a.
  - 6) 西藏大〈北京版〉5, 241, 5, l. 1~。
  - 7) " 5, 243, 1, l. 2~。
  - 8) " 〈北京版〉77, 119, 4, l. 4~。
  - 9) " 〈上 同〉
  - 10) " 77, 121, 4, l. 2~。参照のこと。
  - 11) " 77, 121, 2, l. 5~。〈北京版〉5の本経には見当たらない文である。  
しかし、『大疏』（大正蔵 39, 592, a）にこれとそっくりの文がある。

（大正大学大学院修了）